Japanese Association of Educational Psychology

292 Jap. J. of Educ. Psychol, VOL. XXXI, No. 4 (1983)

大学生における同一性の諸相とその構造

加　藤　　厚*

問　　題

青年期は，生物学的，心理学的，そして社会学的の3重の意味において，子供から大人への移行の期間であると言える。そして，この移行の進展の重要な指標が，同一性（identity）の成立であることは広く認められている。

同一性とは，Erikson, E. H. による構成概念であり，彼の後成的・漸成的(epigenetic)発達図式（1959）において，幼児期以来形成されてきた個別的な多数の同一化(identifications）が，青年期において取捨選択され再構成されることによって成立する，社会的かつ現実的な自我の確立の状態として位置づけられている。青年期以前の同一化が，多くは遊戯的で一貫性を欠くのとは対照的に，青年期に形成される同一性は自覚的かつ現実的で，一貫性と発展性とをあわせ持っている。

この極めて包括的で抽象度の高い同一性概念を実証的研究の対象とするために，多くの試みが行われてきているが，それらは同一性を概念化する様式において2群に大別できる。まず第1群は，同一性を「拡散」と「統合」とを両極とする1次元をなすものとしてとらえるアプローチである。同一性の達成の程度は，それに付随すると考えられる諸特徴の水準に基づいて，1次元の上に位置づけられる。ここでは，同一性が成立する過程および機構は，必ずしも問題にされていない。このアプローチをとった研究としては，面接を用いたBronson(1959)，Q分類技法を用いたGruen (1960)，質問紙法を用いたRasmussen (1964)，Dignan (1965)，砂田(1979)，遠藤（1981)などがある。

同一性を概念化する第2の様式は，Marcia, J. E. による同一性地位**(identity status）アプローチである(1966, 1980)。彼は上述の一次元的アプローチにあきたらず，同一性形成の機構それ自体を解明することを意図して，同一性の状態を規定する心理社会的要因として以下の2変数を仮定している。

(1) 危機***(crisis)の有無，すなわち，いかなる役割，職業，理想，イデオロギー等が自分にふさわしいかについて，迷い考え試行する時期の有無

(2) 自己投入(commitment****)の有無，すなわち，自己定義を実現し自己を確認するための，独自の目標や対象への努力の傾注の有無

Marcia の手続では，この2変数に関する情報は，半構造化された面接によって集められ，被面接者は以下の4つの同一性地位（identity status）のいずれかに分類される。

(1) 同一性達成地位（identity achievement status）：危機を経たうえで，現在自己投入の対象を持っている者

(2) 権威受容地位（foreclosure status*****）：危機を経ることなしに，両親や社会通念が支持するものを自らの自己投入の対象としている者

(3) 積極的モラトリアム地位******(moratorium status)：明確な自己投入の対象を主体的に獲得しようとして，現在危機のさなかで積極的な努力を行って

* 筑波大学心理学研究科

** identity status の意味するところは，同一性の形成という発達課題への対処，その解決の様式である。従って，同一性状況，同一性特性等の訳語も可能であるが，これまでの諸研究(例えば無藤，1979)に従って同一性地位とした。

*** ここで使われる危機(crisis）という用語は，ある個人の発達における「重大な転換点，わかれめ」を意味するものであり，危険を意味するものではない。

**** 傾倒（無藤，1979)，帰依（砂田，1979）等とも訳される。

***** 従来，早期完了（村瀬，1972)，打ちきり（加藤，1978）等と訳されてきているが，本研究ではその成立の過程を重視して「権威受容」とした。

****** 日本語の「モラトリアム」には，積極的建設的な努力の要素は少なく，むしろ本来の moratorium と同一性拡散の中間状態であると考えられる。そこで，本研究では，「積極的モラトリアム」を moratorium の訳とした。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

いる者

(4) 同一性拡散地位（identity diffusion status）：過去の危機の有無にかかわらず，現在自己投入を行っていない者

Marcia によるこの同一性地位アプローチは，

(1) 非常に抽象度の高い同一性概念を，より抽象度の低い危機および自己投入の2変数によって定義している

(2) 上の2変数の組合わせによって，同一性形成の過程および機構に関する説得力あるモデルが示されている

(3) 組合わせの結果，同一性概念により多様な可能性が与えられ，より精密な分析が可能となった（例えば権威受容地位）

等の多くの長所を持っており，本邦でも無藤（1979）によってその妥当性の検討と修正とが試みられている。

しかしながら，面接法によるこの手続では，多数のデータを収集することは困難である。また，危機および自己投入について，面接者が有るか無いかという非常に大まかな判断を行う点は，必ずしも客観的で妥当な判定方法とは言えない。従って，同一性地位概念の検討と整理とをふまえた適切な手順に則り，かつ多数のデータの収集が可能な客観的判定方法の開発が必要である。

同一性形成の機構を検討し，その構造を理解するにあたって重要なもう1つの問題は，同一性の成立にとって重要な心理社会的領域の究明である。

従来の研究においては，職業とイデオロギー（政治的および宗教的）の2領域が，検討すべき主要な領域とされて来ている（Erikson, 1963；Marcia, 1980）。しかし，研究者の関心の所在や研究対象に応じて，性役割，価値観，対人関係等の領域がつけ加えられて来ており（Matteson, 1972；無藤，1979；Grotevant, Thorbecke, & Meyer 1982），いかなる領域における危機および自己投入が同一性の形成において重要であるか，についての包括的な検討は行われていない。

また，男子に対する社会的期待・要請と女子に対するそれらとは同一であるとは言えず，従って同一性形成における諸領域の重要性には性差があることが予想される。しかしながら，同一性に関する従来の研究は，Matteson (1972) 等のいくつかの例外を除いて，男子のみ，あるいは女子のみをその対象として行われて来ており，性差に関する包括的な検討は行われていない。

目　　的

Marcia が提示した同一性地位概念を検討整理し，その客観的な判定を可能にする質問紙を作成することが，本研究の第1の目的である。

その質問紙を実施した結果から，大学生における同一性の諸相，すなわち各同一性地位の分布を把握することが，本研究の第2の目的である。

そして，各個人の全体的な同一性の状態と，諸領域・諸時点における危機および自己投入の水準との関係から，同一性形成における各領域および各発達段階の重要性を検討し，あわせて各同一性地位の特徴をあきらかにすることが，本研究の第3の目的である。また性差についても包括的な検討を行う。

なお本研究で大学生を研究対象とするのは，彼らが社会制度としての支払猶予期間（moratorium）である学校制度の最終段階に位置し，自らの同一性の問題に関して最も自覚的であることが期待されるからである。

方　　法

1. 同一性地位判定尺度

上述したように，Marcia は危機と自己投入の2変数によって各同一性地位を定義している。しかし，同一性達成地位と権威受容地位とは過去の危機の有無によって判別されるのに対し，積極的モラトリアム地位は，明確な自己投入の対象を求めて現在危機のさなかにいる，というように，危機には過去のそれと現在のそれの2つが含まれている。また，積極的モラトリアム地位を特徴づける現在の危機は，将来への展望を伴ったものであることが必要であろう。そこで本研究では，以下の3変数を測定し，その組合わせによって同一性地位の判定を行うこととした。

(1) 一般的な（領域を特定しない）「現在の自己投入」の水準

(2) 一般的な「過去の危機」の水準

(3) 一般的な「将来の自己投入の希求*」の水準

いずれも領域を特定しなかったのは，この尺度による同一性地位の判定結果と，別の質問紙による具体的な個々の領域における危機および自己投入の水準とを関連づけることによって，より明確な対応関係を示す領域，すなわち同一性の形成にとって重要な領域を同定するためである。

Marcia (1966, 1980) の記述を参考にしつつ，(1)については目標の自覚と努力を，(2)については疑問・迷いと決断を，そして(3)については意欲と探索をその内容とする項目群を，それぞれの時制にあわせて作成した。青年心理学専攻の大学院生2名，および青年心理学の領域で

* 「将来の自己投入の希求」は，「現在の危機」とほぼ同義であると考えられるが，時間的展望の有無をも包含している点でより適切であると判断した。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

卒業研究を行っている学部4年生3名，計5名の協力を得て各項目の意味および表現の検討と修正を行い，全員の同意が得られた各4項目ずつ，計12項目からなる質問紙を構成した。

回答法は「まったくそのとおりだ」から「全然そうではない」までの6件法とし，最も高い水準に対応する反応を6点，最も低い水準に対応する反応を1点として，4項目の合計得点を各変数の値とした。

項目分析

各項目の内容，および3変数の各々とその下位項目との相関係数を TABLE 1 に示した。なお，調査対象者は，以下の分析のそれと同一の大学生310名である。

TABLE 1 同一性地位判別尺度の項目，および各変数との相関

変数	項目内容	相関係数
現在の自己投入		
	†私は今，自分の目標をなしとげるために努力している	.74
	私には，特にうちこむものはない	.75
	†私は，自分がどんな人間で何を望みおこなおうとしているのかを知っている	.74
	私は，『こんなことがしたい』という確かなイメージを持っていない	.82
過去の危機		
	私はこれまで，自分について自主的に重大な決断をしたことはない	.59
	†私は，自分がどんな人間なのか，何をしたいのかということを，かつて真剣に迷い考えたことがある	.70
	私は，親やまわりの人の期待にそった生き方をする事に疑問を感じたことはない	.58
	†私は以前，自分のそれまでの生き方に自信が持てなくなったことがある	.62
将来の自己投入の希求		
	†私は，一生けんめいにうちこめるものを積極的に探し求めている	.71
	私は，環境に応じて，何をすることになっても特にかまわない	.52
	†私は，自分がどういう人間であり，何をしようとしているのかを，今いくつかの可能な選択を比べながら真剣に考えている	.67
	私には，自分がこの人生で何か意味あることができるとは思えない	.66

†「まったくそのとおりだ」のとき6点，他は「全々そうではない」のとき6点

各変数と下位項目との相関係数は，.82～.52で，多くは，.60以上である。一方，3変数間の相関係数は以下のとおりであった。

「現在の自己投入」と「過去の危機」

：r＝.18

「現在の自己投入」と「将来の自己投入の希求」

：r＝.33

「過去の危機」と「将来の自己投入の希求」

：r＝.25

この結果は，各変数を構成する4つの下位項目の一貫性と，3変数の相対的独立性を示唆するものである。そこで，全12項目からなるこの質問紙を，同一性地位判定尺度として用いることとした。

同一性地位判定の手続

Marcia の分類基準を参考にしつつ，以下のように6つの同一性地位を定義した。

(1) 同一性達成地位：過去に高い水準の危機を経験した上で，現在高い水準の自己投入を行っている者

(2) 権威受容地位：過去に低い水準の危機しか経験せず，現在高い水準の自己投入を行っている者

(3) 同一性達成－権威受容中間地位（A－F中間地位）：中程度の危機を経験した上で，現在高い水準の自己投入を行っている者

(4) 積極的モラトリアム地位：現在は高い水準の自己投入は行っていないが，将来の自己投入を強く求めている者

(5) 同一性拡散地位：現在低い水準の自己投入しか行っておらず，将来の自己投入の希求も弱い者

(6) 同一性拡散－積極的モラトリアム中間地位（D－M中間地位）：現在の自己投入の水準が中程度以下の者のうちで，その現在の自己投入の水準が同一性拡散地位ほどには低くないが，将来の自己投入の希求の水準が積極的モラトリアム地位ほどには高くない者

より具体的には，各地位への分類は，FIG. 1 に示した流れ図に従って行った。分類の基準となる値は，それぞれ各変数のカッコ内の水準と対応している。

20点：（かなりある；かなりあった）

14点：（ある〔あった〕ともない〔なかった〕ともいえない）

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

12点：(どちらかといえばない〔なかった〕)。

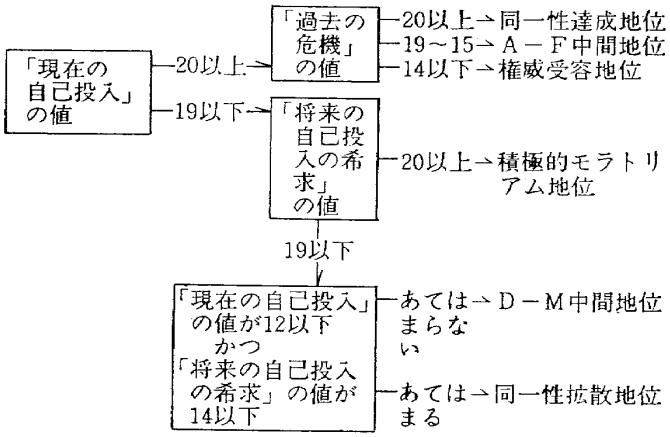

FIG. 1 各同一性地位への分類の流れ図

同一性地位判定尺度の妥当性の検討

本尺度は，Marcia によって示された同一性地位理論の検討と整理とをふまえたものであり，構成概念妥当性は満たしているといえる。しかし，何らかの外的基準にもとづく実証的な妥当性の検討も併せて行うことがより望ましい。そこで，筑波大学保健管理センターの協力を得て，ステューデントアパシー的状態を呈する3名のクライエント(大学生)に本尺度を実施することができた。

担当カウンセラーの臨床診断によると，3名の状態は以下のとおりであった。

ケース1 (20歳，男性)：アパシー

ケース2 (21歳，男性)：典型的アパシー

ケース3 (20歳，女性)：準アパシー

一方，同一性地位判定尺度による，3クライエントの同一性地位，および3変数（現在の自己投入，過去の危機，将来の自己投入の希求）の得点は以下のとおりであった。

ケース1：D－M中間地位 (13, 19, 16)

ケース2：同一性拡散地位 (10, 15, 12)

ケース3：D－M中間地位 (18, 18, 19)

ケース1は同一性拡散に近いD－M中間地位であり，ケース3はむしろ積極的モラトリアム地位に近いD－M中間地位と判定された。ケース2は典型的な同一性拡散地位であった。本尺度による3クライエントの判定と臨床診断との間には，かなり良い対応が認められる。従って，ケース数は3例にすぎないが，臨床診断を外的基準とした同一性地位判定尺度の妥当性の検討の結果は，肯定的なものであったと言える。

2. 領域別危機—自己投入質問紙

先に記したように，同一性の重要な構成要素としては，従来，

(1) 職業

(2) 政治的イデオロギー

(3) 宗教的イデオロギー

の各領域が検討されて来ている。本研究では，同一性の成立における諸領域の重要性を包括的に検討するため，上の3領域に

(4) 家族との関係

(5) 同性の友人との関係

(6) 異性の友人との関係

(7) 男らしさ；女らしさ

(8) 勉強

(9) 趣味

(10) 社会的態度および活動

(11) 生き方や価値

の各領域を加えた，計11領域の各々について，現在および過去の危機と自己投入の水準の回答を求める質問紙を作成した。

危機は「迷ったり考えたりする（した）経験」という表現で，また自己投入は「重要な生きがいあるいは努力の対象」という表現で，教示文において説明した。より具体的には，(1)現在，(2)大学に入ったころ*，(3)高校2年生のころ，の3時点の各々における危機および自己投入の水準について，0点から3点までの4件法によって回答を求めた。特に迷いも考えもしない，あるいは，特に重要ではなく努力もしないという水準が0点，非常に考え迷う，あるいは，非常に重要な生きがい，努力の対象であるという水準が3点である。危機に関する教示文と諸領域を TABLE 2 に示した。

3. 調査の対象者および時期

2つの国立大学（神奈川県および茨城県）の，青年心理学および心理学概論の受講生を対象として調査を実施した。1982年5月に予備調査を，9～10月に本調査を行った。両調査を込みにした対象者の内訳は，TABLE 3 に示したとおりである**。

結果と考察

前述したとおり，本研究は大学生全般における同一性の諸相とその構造を明らかにすることを意図する試みである。しかし，大学4年生は卒業すなわち実社会への参加をひかえて，1～3年生とは異なった危機や自己投入の様相を呈することも考えられる。そこで，4年生と1～3年生との間で11領域の各々における現在の危機およ

* 9～10月に実施された本調査においては，大学1年生に対しては，「大学にはいったころ」とは1年次の4～5月ごろ，「現在」とは9～10月であるとの教示を行って回答を求めた。大学1年生のデータの92%(89名中82名）は，本調査によるものである。

** 大学4年生には，留年生は含まれていない。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

TABLE 2 危機に関する教示文と諸領域

以下に示されているおのおのについて，現在のあなたはどの程度迷ったり考えたりしていますか。また高校2年生のころ，大学に入ったころのあなたはどうでしたか。

特に迷いも考えもしていないものに0点，少し考え迷っているものに1点，かなり考え迷っているものに2点，非常に考え迷っているものに3点というように，考えたり迷ったりしている程度に応じてそれぞれに点をつけてください。

a 自分と家族との関係
b 同性の友人との関係
c 異性の友人との関係
d 男らしい生き方；女らしい生き方
e 勉強
f 将来の仕事
g 自分にふさわしい趣味
h 政治に対する自分の態度
i 社会問題に対する自分の態度
j 宗教に対する自分の態度
k 自分がめざすべき生き方や価値

TABLE 3 調査対象者の内訳

	1年	2年	3年	4年	合計
男子	55	49	57	9	170
女子	34	42	59	5	140
合計	89	91	116	14	310

び自己投入の水準の差の検定を行ったところ，有意な差は「男らしさ；女らしさ」の1領域において認められたにすぎなかった（危機は $t=2.27$, $df=308$, $p<.05$, 自己投入は $t=2.00$, $df=308$, $p<.05$, いずれの水準も1～3年生の方が4年生より高い）。そこで本研究では，全学年にわたる大学生における傾向と特徴とを概観する立場から，1年生から4年生にわたる全被調査者を対象とする分析を進めることとした。

1. 各同一性地位の分布

各同一性地位を定義する3変数の，調査対象者全体における平均と標準偏差は以下のとおりである。

(1) 現在の自己投入：
$M=17.2$ $SD=3.3$

(2) 過去の危機：
$M=17.8$ $SD=3.1$

(3) 将来の自己投入の希求：
$M=17.5$ $SD=3.1$

上の平均値を判定すると，やや積極的モラトリアム地位に近いD－M中間地位であるといえる。

FIG. 1に示した定義に基づく各同一性地位の分布をFIG. 2に示した。

同一性拡散地位および権威受容地位はそれぞれ全体の約

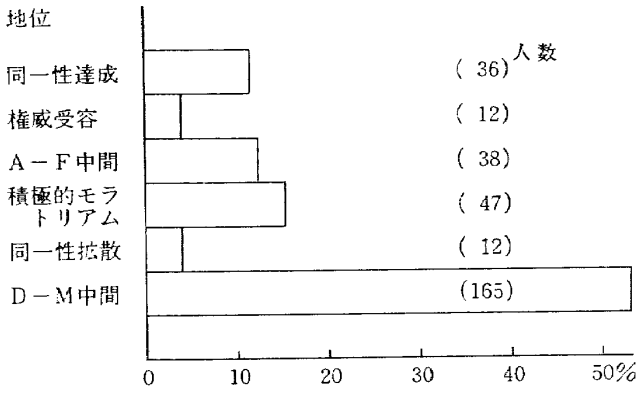

FIG. 2 各同一性地位の分布

4％にすぎず，本研究の対象者である大学生の集団において両地位の占める割合はかなり小さい。また，D-M中間地位が全体の約半数を占めている点が注目される。

従来の2分割にかわって，各変数の得点を選択肢の意味を生かした値でそれぞれ3分割することによって，現状をより適切に反映する同一性地位の判定が可能となったといえよう。

なお，各同一性地位に所属する男女の人数は以下のとおりであり，分布には有意な性差は見られなかった（$\chi^2=6.4$, $df=5$, n. s.）。

同一性達成地位	17：19（男：女）
権威受容地位	9：3（以下同）
A－F中間地位	26：12
積極的モラトリアム地位	26：21
同一性拡散地位	7：5
D－M中間地位	85：80

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

2. 諸領域における危機および自己投入のプロフィールに基づく，各同一性地位の特徴の比較

本研究において定義された同一性地位は，領域を特定しない3変数に基づくものであり，具体的な諸領域における危機および自己投入の水準についての各同一性地位の特徴は，同一性地位判定尺度のみからは明らかにしえない。そこで，領域別危機—自己投入質問紙によって測定された全11領域における危機および自己投入の水準を，各同一性地位間で比較することによって，各同一性地位の特徴のより詳細な検討を行った。またこの分析は，同一性の成立にとって重要な領域の検討でもある。なぜなら，重要な領域においては，各同一性地位間でその危機あるいは自己投入の水準に有意な差があることが期待されるからである。

各同一性地位の特徴の概要を把握することを目的として，現在，大学に入ったころ，高校2年生のころの3時点を平均した各領域ごとの危機のプロフィールをFIG. 3，に，自己投入のプロフィールを，FIG. 4に示した。なお，諸領域は，危機あるいは自己投入の全体平均値が高いものから順に，左から右へ配置されている。従って，左の領域ほど危機あるいは自己投入の頻度および水準が高い領域，すなわち平均的な重要性が高い領域であるといえる。

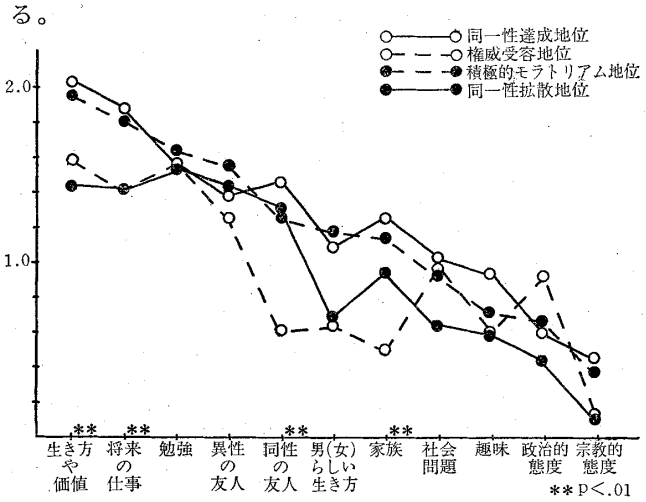

FIG. 3　諸領域における4典型地位の危機の水準

危機の水準については，「生き方や価値」，「将来の仕事」，「同性の友人との関係」，および「家族との関係」の4領域において，1％水準の有意差が認められた。（平均値の差の検定は全6同一性地位を対象として行った。図には繁雑を避けるため，4つの典型地位のプロフィールのみを示した）。

ここで興味深いのは，これらの4領域において，同一性達成地位が一貫して最高値を示しており，一方それとは対照的に，権威受容地位が同一性拡散地位とならんで，ほぼ一貫して最低値に近い値を示している点である。同

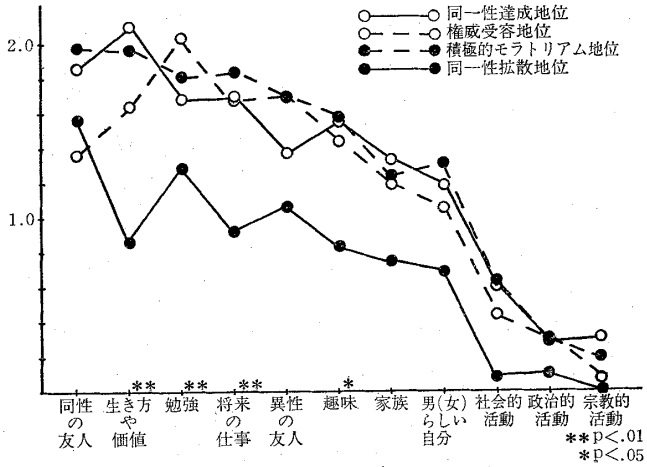

FIG. 4　諸領域における4典型地位の自己投入の水準

性の友人および家族との関係という基本的な人間関係の領域において，権威受容地位の危機の水準がひときわ低い点も注目される。また，積極的モラトリアム地位は，将来の自己投入を求めて現在危機のさなかにいるというその特質を反映して，一貫して高い水準のプロフィールを示している。

自己投入の水準については，「生き方や価値の追求」，「勉強」，「将来の仕事」の各領域で1％水準の，「趣味」の領域で5％水準の有意差が認められた。

同一性達成地位が「生き方や価値の追求」に最高値を示し，権威受容地位が「勉強」に最高値を示していることは，前者の自覚的で革新的な姿勢，および後者の現状順応的な性格の反映と考えられ，興味深い。

積極的モラトリアム地位の自己投入の水準は概して高く，「同性の友人との関係」，「将来の仕事」等の領域においては最高値を示している。「将来の仕事」の領域で，この地位が最も高い水準を示したのは，「将来の仕事」を重視するがゆえに現在の自己を支払猶予期間(moratorium)に位置づけている，いわば「高次の」積極的モラトリアム地位に所属する者が，この地位に多数含まれていることの表われであろう。

同一性拡散地位は，一貫して非常に低い自己投入の値を示しており，その特徴は明瞭である。特に，「生き方や価値の追求」および「将来の仕事」の2領域における自己投入の水準の低さには，この地位の没理想性および時間的展望の欠如という2特質がよく表われている。

なお，権威受容地位は，「同性の友人との関係」および「生き方や価値の追求」の2領域において，特徴的に低い水準を示している。このプロフィールは，全体的な右さがりの傾向とは対照的なものであり，あまり「若者らしからぬ」印象を受ける。

危機および自己投入のプロフィールに見られる各同一

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

性地位のこれらの特徴は，理論上期待される特徴とよく一致しており，これらの結果は，同一性地位判定尺度の妥当性を新たな角度から支持するものである。

また，同一性の成立に対して各領域の持つ重要性については，以下のことが示唆された。

(1) 危機に関して重要な領域は，「生き方や価値」，「将来の仕事」，「同性の友人との関係」，「家族との関係」である。

(2) 自己投入に関して重要なそれらは，「生き方や価値の追求」，「勉強」，「将来の仕事」，「趣味」である。

3. 男子および女子の同一性地位の形成において重要な領域および時期の検討

上の分析によって，各同一性地位の特徴および諸領域の重要性の概略が明らかにされた。しかし，そこで検討された危機および自己投入の水準は3つの時点の平均値であり，各々の時点における危機および自己投入の水準と現在の同一性地位との関係は明らかにされていない。また性差も検討されていない。そこで，男子および女子大学生の同一性地位が形成される過程において，各領域・各時期における危機および自己投入の持つ重要性を評価することを目的として，現在の全6同一性地位間でそれらの水準を比較する分散分析を行った。男子におけるその結果をTABLE 4に，女子のそれをTABLE 5に示した。

TABLE 4 各同一性地位間での危機および自己投入の水準の比較（男子）

		現在	大学に入ったころ	高校2年生のころ
危機の領域	自分と家族との関係		*	
	同性の友人との関係			
	異性の友人との関係			
	男らしい生き方；女らしい生き方			*
	勉強			
	将来の仕事	**	*	**
	自分にふさわしい趣味			
	政治に対する自分の態度			
	社会問題に対する自分の態度			
	宗教に対する自分の態度			
	自分がめざすべき生き方や価値	**	*	
自己投入の領域	自分と家族との関係	*		
	同性の友人との関係			
	異性の友人との関係			
	男らしい自分；女らしい自分			
	勉強	*	**	**
	将来の仕事	**	*	
	個人的趣味			
	政治的活動			
	社会的活動			
	宗教的活動			
	望ましい生き方や価値の追求	*	*	

**p<.01，*p<.05

男子においては，「将来の仕事」と「生き方や価値」の領域で，危機と自己投入の両者において一貫した有意差が認められる。また「勉強」への自己投入においても一貫した有意差が見られる。しかし，3つの時期の間には，その重要性についての明確な差異は認められない。

女子においては，まず「大学に入ったころ」の危機の水準に多数の有意差が認められる点が注目される。これは，女子大学生の同一性地位の形成において，この時期の危機が重要な意味を持つことを示唆する結果である。

また，「大学に入ったころ」と「現在」の両時点の自己投入の水準にも，一貫した多数の有意差が認められる。その領域は，「同性の友人との関係」，「勉強」，「将来の仕事」，「生き方や価値の追求」である。

上の結果は，特に女子において，「大学に入ったころ」の時点における危機および自己投入の水準が，その後の同一性地位と密接に関係することを示唆している。

大学への入学は，それまでの受身的な勉強から主体的でより専門的な学習への移行を意味し，また多くの学生にとって初めて親元を離れて独立した生活を営むことを伴うものである等，青年期における重要な転換点である。そこで，この時期における男子大学生および女子大学生の，諸領域における危機および自己投入のプロフィール

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

TABLE 5　各同一性地位間での危機および自己投入の水準の比較（女子）

		現在	大学に入ったころ	高校2年生のころ
危機の領域	自分と家族との関係		**	
	同性の友人との関係		*	
	異性の友人との関係			
	男らしい生き方；女らしい生き方			
	勉強			
	将来の仕事		**	*
	自分にふさわしい趣味		*	
	政治に対する自分の態度	*	**	
	社会問題に対する自分の態度	**	*	
	宗教に対する自分の態度	*		
	自分がめざすべき生き方や価値	*	**	
自己投入の領域	自分と家族との関係			
	同性の友人との関係	**	**	
	異性の友人との関係			
	男らしい自分；女らしい自分			
	勉強	**	**	
	将来の仕事	**	**	
	個人的趣味			
	政治的活動			
	社会的活動			
	宗教的活動	*		
	望ましい生き方や価値の追求	**	**	*

**p<.01，*p<.05

と，その後の同一性地位との関係についてさらに検討を進めることとした。

(1)　男子大学生のプロフィールの検討

男子大学生における「大学に入ったころ」の時期の危機および自己投入のプロフィールを，4つの典型地位について，FIG. 5 および，FIG. 6 に示した。

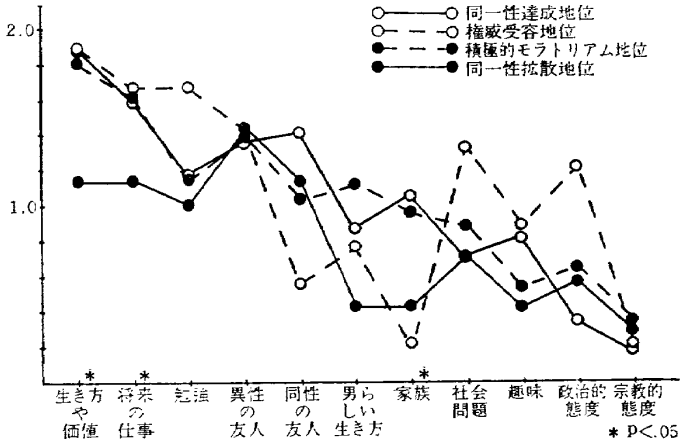

FIG. 5　諸領域における4典型地位の「大学に入ったころ」の危機の水準（男子）

各同一性地位のプロフィールの特徴は，以下のように要約できよう。

①　現在同一性拡散地位に所属する者は，大学に入ったころに，「生き方や価値」および「将来の仕事」について危機を体験したり，自己投入を行うことが少なかった者である。

②　現在同一性達成地位に所属する者は，大学に入ったころ，「生き方や価値の追求」に自己投入し，「勉強」にはむしろ自己投入しなかった者である。

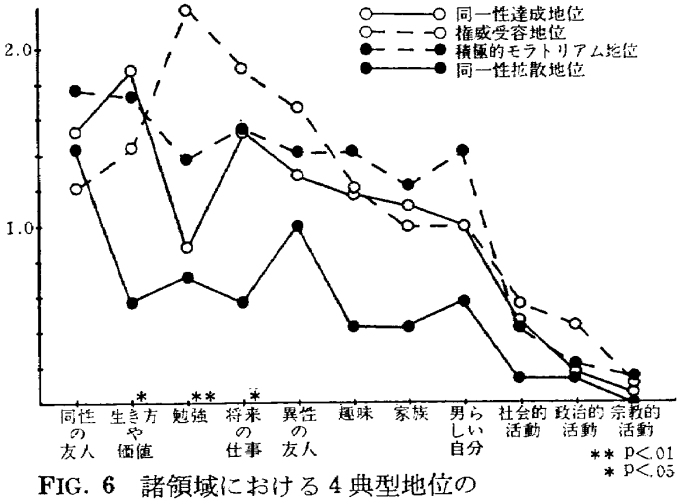

FIG. 6　諸領域における4典型地位の「大学に入ったころ」の自己投入の水準（男子）

③　現在権威受容地位に所属する者は，大学に入ったころ，「家族」や「同性の友人」との関係については危機を体験せず，むしろ「勉強」や「社会問題」，「政治」に関心を示していた。またそのころ，「勉強」，「将来の仕事」，「異性の友人」に高い水準の自

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

己投入を行っていた。家族や同性の友人といった基本的な人間関係において安定した基礎を持ち，現実的な課題に精力を集中する早成した人間という印象を受ける。

④ 現在積極的モラトリアム地位に所属する者の大学に入ったころの危機のプロフィールは，同一性達成地位のそれとほぼ同一である。自己投入のプロフィールも同一性達成地位のそれと類似しているが，よりなだらかで，とりわけ顕著な特徴は見られない。わずかに，「男らしい自分」および「同性の友人との関係」への自己投入において最高値を示している点が注目される。

(2) 女子大学生のプロフィールの検討

女子大学生における「大学に入ったころ」の時期の危機および自己投入のプロフィールを，4つの典型地位について，FIG. 7 および，FIG. 8に示した。

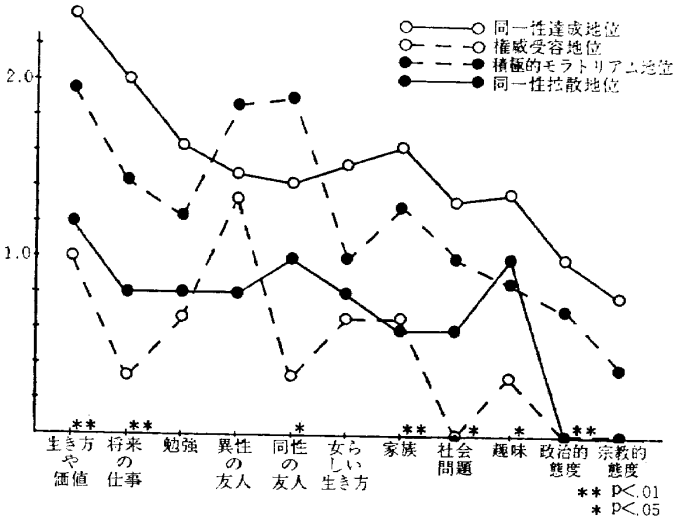

FIG. 7 諸領域における4典型地位の「大学に入ったころ」の危機の水準（女子）

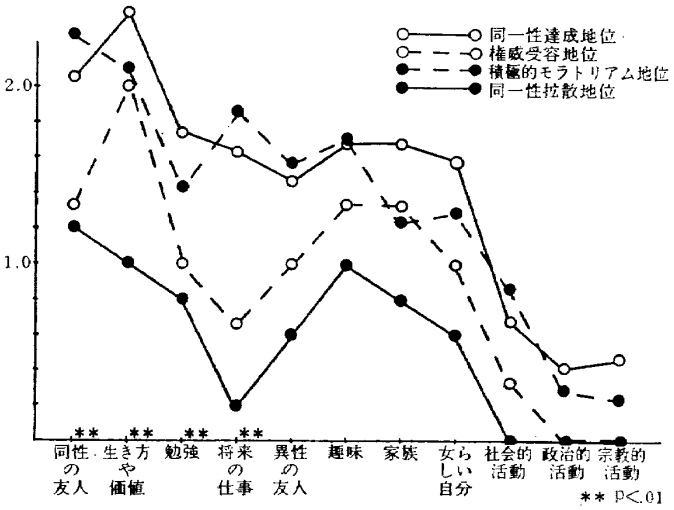

FIG. 8 諸領域における4典型地位の「大学に入ったころ」の自己投入の水準（女子）

各同一性地位のプロフィールから，以下の諸点が指摘できる。

① 現在同一性拡散地位に所属する者の，大学に入ったころの特徴は，諸領域，とりわけ「生き方や価値の追求」および「将来の仕事」への自己投入の水準の低さである。

② 現在同一性達成地位に所属する者は，大学に入ったころ，全領域において高い水準の危機を体験しており，また「生き方や価値の追求」および「勉強」に自己投入していた。

③ 現在権威受容地位に所属する者のこの時期における特徴は，「異性の友人との関係」を除いた全領域における危機の水準の低さである。この傾向は，「将来の仕事」，「社会問題」，「政治的態度」といった，広い視野を必要とする領域において，より顕著である。また，「将来の仕事」と「同性の友人との関係」の2領域において，危機と自己投入の両者の水準がともに低い点も特徴的である。

④ 現在積極的モラトリアム地位に所属する者は，この時期「同性の友人」および「異性の友人」との関係について，高い水準の危機を体験し，また「同性の友人との関係」および「将来の仕事」の領域において高い水準の自己投入を行っている。権威受容地位のそれとは対象的な特徴を示すプロフィールである。

本研究の意義と今後の課題

本研究の第1の意義は，Marcia によって提出された同一性地位の概念を検討整理して，「現在の自己投入」，「過去の危機」，「将来の自己投入の希求」の3変数からなる同一性地位判定尺度を作成した事である。この尺度を使用することによって，300人以上に及ぶ調査対象者のデータを収集することができ，大学生における同一性の諸相についての，より一般性のある検討が可能となった。また，より具体的な諸領域における，各同一性地位の危機および自己投入のプロフィールに見られる特徴は，この尺度の妥当性を支持するものであった。

この尺度の特徴としては，3つの変数の値をその意味をふまえて3分割し，それを組合わせることによって，現状をより適切に反映すると思われる6つの同一性地位を設定している点が指摘できる。その結果，大学生の約半数は，日本語の「モラトリアム」に相当するD－M中間地位に所属し，また権威受容地位および同一性拡散地位は，従来の研究（Marcia, 1966; Orlofsky, Marcia, & Lesser 1973；無藤，1979等）が示唆するほどには多くないことが示された。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

本研究で質問紙を用いた根拠としては，多くのデータを収集しうる点に加えて，(1)大学生には十分な自己観察能力が期待できる，(2)面接法と比較して，無記名の質問紙の方が，社会的望ましさや防衛等の要因による回答の偏向が少ないことが期待される，等があるが，この方法論および各項目の内容と同一性地位の判定基準に関しては，今後一層の検討が必要であろう。

第2の意義としては，4つの典型同一性地位について，諸領域における危機および自己投入のプロフィールを検討して，各同一性地位の特徴と諸領域の重要性を明らかにした点があげられよう。さらに，現在の同一性地位と，3つの時点の各々における危機および自己投入の水準とを関連づける分析も試みられ，特に「大学に入ったころ」の諸領域における危機および自己投入の水準と現在の同一性地位との関係については，詳細な検討が行われた。領域の重要性については，「生き方や価値」，「将来の仕事」，「勉強」，「同性の友人」等が，同一性地位の形成において重要な領域であり，「政治」や「宗教」は重要な領域とは言い難いことが示された。

しかし本研究に関して，質問紙法一般の限界に加えていくつかの問題点が指摘できる。

(1) 回顧的な資料収集の信頼性と妥当性が証明されていない。

(2) 権威受容，同一性拡散の両地位はその人数が少ないため，明らかにされた諸特徴は必ずしも確定的ではない（特に男女を分けた分析の場合）。

(3) 個人の水準における同一性地位の移行等に関する，より詳細な検討が行われていない。

本研究は，大学生における同一性の諸相とその構造の概要，全般的傾向の把握を意図した試みであり，所期の目的は一応達成されたといえよう。しかしサンプリング等の限界もあり，学年差については十分解明することはできなかった。従ってこの点に関しては，より適切なサンプリングを行って追求することが今後の課題である。また，危機から自己投入に到る具体的な過程の究明，同一性の発達的展開に関する縦断的研究等も，重要な課題として挙げられよう。

要　　約

Marcia, J. E. による同一性地位概念を客観的な測度によって測定し，その成立における11の心理社会的領域（家族との関係，将来の仕事，生き方や価値等）および3つの時期（現在，大学に入ったころ，高校2年生のころ）の重要性を検討し，あわせて各同一性地位の特徴を明らかにすることが本研究の目的である。

概念的検討整理をふまえて，「現在の自己投入」，「過去の危機」，「将来の自己投入の希求」の3変数の組合わせによって，6つの同一性地位を定義する同一性地位判定尺度を作成した。

大学生310名（男子170名，女子140名）のデータを分析した結果，以下の諸点が示された。

(1) 同一性拡散地位および権威受容地位は，それぞれ全体の約4％を占めるにすぎず，同一性拡散-積極的モラトリアム中間地位が，全体の約50％を占める。

(2) 男子においては，「将来の仕事」および「生き方や価値」の領域における危機と自己投入，「勉強」の領域における自己投入が，同一性地位と密接に関連している。

(3) 女子においては，「大学に入ったころ」の危機の水準，および大学入学以降の「同性の友人との関係」，「勉強」，「将来の仕事」，「生き方や価値の追求」の各領域における自己投入の水準が，同一性地位と密接に関連している。

(4) 「政治」や「宗教」は，大学生における同一性地位の形成において，重要な領域であるとは言い難い。

各同一性地位の特徴およびその性差も，特に「大学に入ったころ」の危機および自己投入の水準に関して，詳しく検討された。

文　　献

Bronson, G. W. 1959 Identity diffusion in late adolescents. *J. Abnorm. Soc. Psychol.*, 59, 414–417.

Dignan, M. H. 1965 Ego identity and maternal identification. *J. Personal. Soc. Psychol.*, 1, 476–483.

遠藤辰雄（編） 1981 アイデンティティの心理学 ナカニシヤ出版

Erikson, E. H. 1959 Identity and the life cycle. *Psychol. Iss.*, 1, 1–171.

Erikson, E. H. 1963 *Childhood and Society* (2nd ed.). Norton.

Grotevant, H. D. Thorbecke, W. & Meyer, M. L. 1982 An extension of Marcia's identity status interview into the interpersonal domain. *J. Youth Adoles.*, 11, 33–47.

Gruen, W. 1960 Rejection of false information about oneself as an indication of ego identity. *J. Consult. Psychol.*, 24, 231–233.

加藤隆勝 1978 自己意識の発達に関する研究の現状と課題 東京教育大学教育学部紀要（第1部），24, 117–124.

Marcia, J. E. 1966 Development and validation

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

of ego identity status. *J. Personal. Soc. Psychol.*, 3, 551-558.

Marcia, J. E. 1980 Identity in adolescence. In Adelson, J. (Ed.) *Handbook of Adolescent Psychology*. Wiley.

Matteson, D. R. 1972 Exploration and commitment : sex differences and methodological problems in the use of identity status categories. *J. Youth Adoles.*, 6, 353-374.

村瀬孝雄 1972 青年期の人格形成の理論的問題——アメリカ青年心理学の一動向—— 教育心理学研究, 20, 250-256.

無藤清子 1979 「自我同一性地位面接」の検討と大学生の自我同一性 教育心理学研究, 27, 28-37.

Orlofsky, J. L., Marcia, J. E., & Lesser, I. M. 1973 Ego identity status and the intimacy versus isolation crisis of young adulthood. *J. Personal. Soc. Psychol.* 27, 211-219.

Rasmussen, J. E. 1964 Relationship of ego identity to psychosocial effectiveness. *Psychol. Rep.*, 15, 815-825.

砂田良一 1979 自己像との関係からみた自我同一性 教育心理学研究, 27, 215-220.

(付記)

本論文は，筑波大学大学院心理学研究科に提出した修士論文（1982年度）の一部を加筆修正したものです。研究にあたって御指導，御校閲下さった加藤隆勝教授，調査に御協力いただいた松原達哉助教授ならびに横浜国立大学の高木秀明助教授に厚く感謝いたします。

(1983年7月25日受稿)

ABSTRACT

A STUDY OF IDENTITY STATUSES AND THEIR STRUCTURE IN UNIVERSITY STUDENTS

by

Atsushi Kato

This study was based on:

(1) the construction of an identitiy status scale based on the examination and refinement of the identity status concept used by Marcia, J. E.

(2) the examination of a status distribution within the university student population.

(3) the evaluation of the significance of crises and commitments in eleven psychosocial areas and three developmental periods.

(4) the examination of the features of each identity status.

After reviewing and examining previous studies, the following two questionnaires were compiled, and administered to 170 male and 140 female under graduates. The first composed of an identity status scale defined six identity statuses based on three variables: present commitment, past crisis, future commitment pursuit. The second is composed of a crisis-commitment questionnaire measuring the level of crisis and commitment in eleven areas (e.g. relations with family members, life styles and values, etc.) and three developmental periods (i.e. the present, the time following students' admission to the university, and the second year of high school).

The validity of the identity status scale was checked using the responses of three apathetic clients as a standard of comparison.

The principal results were as follows:

(1) Both identity diffusion status and foreclosure status represented only four percent of the total sample.

(2) Identity diffusion-moratorium intermediate status represented about fifty percent of the total sample.

(3) In males, the level of crisis and commitment in the areas of "future occupation" and "life styles and values", and the level of commitment in the area of "study", varied significantly among identity statuses.

(4) In females, the level of crisis during "the time following students' admission to the university", and the level of commitment in such areas as "relations with friends of the same sex", "study", "future occupation", and "life styles and values", varied significantly among identity statuses.

(5) Such areas as "political attitude-activity" and "religion" were not significant in the formation of university students' identity statuses.

The features of each identity status and sex differences were also closely examined, especially in relation to the level of crisis and commitment following admission to a university.

NII-Electronic Library Service